

れきしみち

P4 …特集 企画展「家康と三河の城」

P6 …連載「安城歴史散策 風を感じて歴史を歩く16」

P7 …松平シンポジウム／講演会・関連イベント

P8 …さとまつり紹介
市民ギャラリーよりお知らせ

2023.10
No.130

P2

特集

特別展 安城譜代2

三河本多一族

三河に本多あり。

三河の礎を築き、家康の天下統一を助け
現代まで引き継がれた武士の血筋。

1. 立葵紋旗指頭飾り(本願寺蔵)
2. 黒漆塗仏胴二枚胴具足 黒漆角頭巾兜付き(個人蔵)
背景:後久録抄(飯山市ふるさと館蔵)

ANJO CITY MUSEUM OF HISTORY
安城市歴史博物館

れきしみち No.130 令和5年10月発行 編集・発行 安城市歴史博物館

(指定管理者:安祥文化のさと地域運営共同体)

安城市歴史博物館 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀 30 番地 TEL 0566-77-6655

8日目
火縄銃
演武

※雨天のみ中止

7日土・8日金

商品券など
豪華景品が当たる
富突き

※雨天時、
博物館内にて開催

第18回
戦国の秋まつり

8日目
和太鼓
競演

※雨天中止

安祥文化のさとまつり

令和5年 10/7土 8日金
時間 9:00~16:00

会場 安祥文化のさと

・安城市歴史博物館 ・安城市民ギャラリー
・安城市埋蔵文化財センター ・安祥公民館 ・安祥城址公園

プログラム (赤字は有料イベント) ※都合により日時・内容等を変更する
場合があります。ご了承ください。

石舞台 安祥城址	7日	■棒の手演武 ■三河万歳披露	※雨天中止
	8日	■書の実演 ■子ども武者行列「いざ! 安城合戦!」	※雨天中止
公安祥城址	7日	■クイズラリー ■あんじょう家康ガイド	東尾八幡社で 秋の ご朱印頒布
	8日	■勾玉づくり ■さとのマルシェ ■オリジナル缶バッジづくり ※7日のみ	

市民ギャラリー	7日	■桜井風作教室 ■土器作り教室	展示 ■歴史のひろば展(小・中学生の歴史の自由研究を展示) ■発掘のあゆみ展などの歴史展示 ■市民ギャラリー企画展 「美術で味わう 市民ギャラリーレストラン」
	8日	■版画でうちわを作ろう	

歴史博物館	7日	■歴史団体発表	展示 ■特別展 「安城譜代2 三河本多一族」 観覧料 600円(中学生以下無料) 黒漆塗仏胴二枚胴具足 黒漆角頭巾兜付き(個人蔵)
	7日 8日	■花押はんこづくり ■的あて	

安城市民ギャラリーよりお知らせ

市民ギャラリー企画展 美術で味わう 市民ギャラリーレストラン



久野和洋《百合と桃》



成田満喜子《ボカラの店》

これまで本市では、地元ゆかりの美術作家の
作品を収集してきました。本展では、「食べ物」
をテーマに、市民ギャラリーのコレクションの
中から選りすぐった作品と、市内小中学校か
ら寄せられた作品を併せて紹介します。

【開催期間】 令和5年10月6日(金)~10月15日(日)
※10月9日(月・祝)は開館
【休館日】 月曜日
【時間】 9:00~17:00(入館は16:30まで、最終日の観覧は16:00まで)
【会場】 市民ギャラリー展示室D・E
【観覧料】 無料

安祥文化のさと

「安祥文化のさと」とは安城市にある松平氏四代50年の
居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です

[全館共通事項]

住 所 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地
休館日 / 毎週月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/28-1/4)

安城市歴史博物館 開館時間 / 9:00~17:00
TEL:0566-77-6655 FAX:0566-77-6600

安城市民ギャラリー 開館時間 / 9:00~17:00
TEL:0566-77-6853 FAX:0566-77-4491

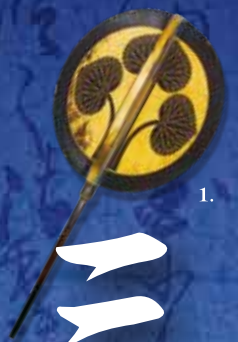
安城市埋蔵文化財センター 開館時間 / 9:00~17:00
TEL:0566-77-4477 FAX:0566-77-6600

安祥公民館 開館時間 / 9:00~21:00
TEL:0566-77-5070 FAX:0566-77-6062

公式HP、SNSもご覧ください

安城市歴史博物館 URL / <https://ansyobunka.jp/>

特別展 安城譜代 二



三河本多一族

安城譜代として、松平氏の時代から仕え、徳川家康の天下統一の後は一族から多くの譜代大名や旗本家を出して江戸幕府を支えた本多一族。一族はさまざまな系統に分かれながらも、各家がそれぞれ松平氏や家康のもとで活躍をみせました。徳川四天王の一人である本多忠勝の一族（中務大輔家）や小川（市内小川町）で出生したとも伝えられる本多正信の一族（ここでは小川本多家とします）をはじめ、本展では鬼作左と称された本多重次の作左衛門家、田原城主となった本多広孝の豊後守家さらに宝飯郡伊奈を本拠地とした伊奈本多家の三家に焦点を当てて紹介します。本多一族に関わる様々な資料から、その活躍や一族の広がりをご覧ください。

令和5年
9月16日^土
～10月29日^日

【休館日】毎週月曜日 ※9月18日、10月9日は開館
【開館時間】9:00～17:00 (入館は16:30まで)
【観覧料】600円
※中学生以下無料
※団体(20名様以上):480円



1. 立葵紋旗指物頭飾り (本願寺蔵)
2. 黒漆塗仏胴二枚胴具足 黒漆角頭巾兜付き (個人蔵)
正信弟の正重家に伝わった甲冑で、正重ゆかりとみられます。

第一章 三河の本多一族

本多一族の各家に伝わる家譜類では、藤原北家を祖としています。伊奈本多家以外の系譜ではさらに、本多助秀のときに豊後(大分県)に入ったと伝えています。助秀が豊後で本拠地とした場所がどこであるかについて、家譜類では詳細な場所を伝えていません。しかし江戸時代末期には豊後の知識人である加島英国が、小川本多家の系譜である駿河田中藩士青木純之助の求めに応じて調査を行い、本多館跡を描いた絵図を作成しています。次代の助定は足利尊氏に従い、勲功を認められ尾張横根郷・栗飯原郷を褒賞として与えられました。

これによって本多氏は尾張に移り、さらに理由は定かではありませんが、後に三河に居住するようになったようです。

本多氏は早くから様々な系統に分かれたため、どの家が宗家筋とされていたのかは判然としません。しかし家紋については、共通して「丸に立葵」を使用しています。

家紋については、豊後守家と伊奈本多家に関する逸話が残っています。豊後守家の家譜である「後久録抄」(飯山市ふるさと館蔵)では、元々嫡家である



立葵紋旗 (膳所藩資料館蔵)
伊奈本多家に伝わる旗で、丸に立葵紋が描かれます。当時はこのような、中央の葉が分かれより左に離れている紋を「左離れ」と呼んでいました。

第二章 家康と本多一族

本多一族は家康のもと三河一向一揆や三方ヶ原の戦い、関ヶ原の戦いなど、様々な戦いで多くの武功を立て、家康の天下統一の一助となりました。忠勝は家譜類によると、永禄三年(一五六〇)の家康の大高攻めに従って以降生涯傷一つ負わなかったと伝えられるほど武に秀でた重臣でした。また正信やその弟正重は三河一向一揆の際に一度家康の元を離反しました。後に家康家臣団に戻ると、正信は主に内政外交で、正重は主に武によって家康を支えました。伊奈本多家は当初今川氏の配下でしたが、後に家康の下につき戦功を挙げています。

また豊後守家は土井城(岡崎市)を本拠地とし、松平長忠以降、松平氏に仕えました。中でも広孝は幼くして家督を継ぎ、松平広忠、家康に仕えました。三河一向一揆では一揆方に挟まれつつも土井城を守り、さらに永禄七年の家康の東三河攻めでは田原城(田原市)を攻略し、以後自らの居城としました。豊後守家は本多一族の中でも早期から居城を得ており、家康からも重用された一族だったことが分かります。家譜類によれば、豊後守家は本多氏が尊氏から横根郷・栗飯原郷を賜ったときの証文を所持していたとも記され、このことから本多一族の中では宗家筋であったと推測されます。

一方作左衛門家は、鬼作左の名で知られる重次が武・政両方の側面から家康を支えました。重次は清康・広忠・家康と三代に仕えた勇猛な武将です。身体中に戦で受けた傷が残っていたとも伝えられ、戦の最前線で戦功を挙げていたことが分かれます。一方で、家康が駿河を支配下に収めて以降、奉行としての働きも顕著になりました。天正十



年(二五八二)に重次が草薙宮(静岡市)に對して出した制札では、草薙宮内の竹木をむやみに伐採することを禁じており、重次が駿河の内政に關与し

ていたことが読み取れます。さらに、重次は駿河を拠点としながらも、天正十六年の書状からは、三河真宗門徒の材木京上にあたり資材の運搬にも關与していたことが分かります。資料の中には天正十三年の石川数正の出兵後、重次が岡崎城代を担ったと記すものもあります。実際は定かではありませんが、重次は広く家康領内の内政に關与する立場にあったであろうことが推測されます。その後の重次は、小田原の陣に従軍した後、天正十八年に上総古井戸(千葉県君津市)に三〇〇〇石で隠居し、下総井野(茨城県取手市)でその生涯を終えました。

第三章 要地への配備

天正十八年の家康の関東移封や慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦い以降、本多一族はその所領を全国各地に移しました。本多忠勝は上総大多喜(千葉県大多喜町)から伊勢桑名(三重県桑名市)に一〇万石で入り、広孝の息子、康重は上野白井(群馬



富正公御代々覚書 附久世騷動記 (越前市指定文化財 越前市立図書館蔵 佐久間家文書)
多一族各家が家康のもとで見せた様々な活躍を読み解くことができます。ぜひ会場で、本多一族の広がりをご覧ください。
(文責:千田佑香)

県洪川市)から家康縁故の地である三河岡崎(岡崎市)で五万石を得、伊奈本多家には酒井忠次の息子康俊が養子に入っており、三河西尾(西尾市)に二万石を与えられました。

また作左衛門家では重次甥の本多富正が福井藩主結城秀康のもとで手腕を振りました。富正は天正十四年より秀康に仕え、慶長五年に秀康が越前(福井県)を拝領すると富正も家老として越前府中(福井県越前市)を与えられました。さらに慶長十八年には重次息子の成重も越前丸岡に入り、家老として富正とともに藩政の中核を担いました。成重は寛永元年(一六二四)に丸岡藩が立藩すると初代藩主となり、その後四代にわたって丸岡の地を治めました。

しかし五家の本多家はその後、幾度の転封や改易に見舞われます。中務大輔家は九度の転封を経て三河岡崎へ、豊後守家は信濃飯山(長野県飯山市)へ、小川本多家は正信弟の正重の系譜が駿河田中(静岡県藤枝市)で存続し明治維新を迎えました。

現在本多家やゆかりの地に伝えられている資料は多くありません。しかし残された資料からは、本

観覧
無料

企画展

家康と三河の城

令和5年

11月18日(土) ▶ 1月14日(日)

令和6年

【休館日】毎週月曜日、12月28日(木)～1月4日(木) ※1月8日は開館

【開館時間】9:00～17:00 (入館は16:30まで)



安城城出土遺物(本館蔵)

愛知県には中世から近世初期にかけて一三〇〇件を超える城があったとされています。城というと石垣と天守のある名古屋城や岡崎城をイメージすることが多いかもしれませんが、そうした城は江戸時代にも存続したわずかな事例です。ほとんどの城は中世に役割を終えたもので、堀や土塁で構成される「土づくりの城」でした。

今回の展覧会では、こうした城について、徳川家康と絡めて概観していくことを企画しました。家康の足跡をたどりつつ、多彩な三河の城を紹介していきます。

1 家康前史―中世の集落と城―

一口に城といっても、造られた時期と性格はさまざまです。またその形は変化する場合が多々あります。

南北朝の動乱以降、緊張状態の中で領主の居館から発展した軍事施設の性格を帯びた方形城館が多く生み出されています。そして、それら城は戦乱が広がる中で軍事拠点として恒常的に維持されていく存在となりました。



1 安城城(安祥城址、安城市)

歴史博物館に接する安城城(安祥城址)は、家康の源流となる安城松平家の居館として知られています。1. 城の中心とみられる現在の大乗寺がある場所のほか、「松平一門・家臣奉加帳写」(島原市島原図書館松平文庫蔵)の記述から、その周囲には城の東と北、堀口(現安城町赤塚付近)に松平一門の居館が存在して



2 昭和40年代の山崎城(安城市)

いたと考えられています。こうした在地支配の拠点としての安城城ですが、天文九年(一五四〇)に始まる安城合戦やその後の戦闘などに伴い、北側の虎口などが付け加えられていったとも考えられています。

一方、山崎城(大岡城)は、当初より軍事的拠点として織田方の松平信孝により築かれた城です。2. 安城城北側からの反織田方の侵攻に備えるためのもので、昭和四十年代まで四方を囲む高さ約5mの土塁や堀が良好に保たれていました。

本展では、こうした各城の特徴についても触れていきたいと考えています。

2 家康誕生から三河平定まで

天文十一年(一五四二)岡崎城(岡崎市)での竹千代(のちの家康)誕生から、永禄九年(一五六六)三河平定までを取り上げます。

竹千代は織田氏・今川氏の人質生活を経て、元服して元信、のちに元康を名乗り、今川氏配下の武将として活動を始めました。永禄元年四月、元康は寺部城(豊田市)の鈴木氏討伐で初陣を飾ったとされています。今川義元が上野(豊田市)の土豪とみら



3 永禄元年今川義元感状(個人蔵 本館寄託)



7 吉田城鉄櫓の野面積み石垣(豊橋市文化財センター提供)

されまし
三河では吉田城(豊橋市)に池田輝政、岡崎城に田中吉政が入ります。岡崎城天守台石垣周辺で発見された金箔瓦、東海地方で最も高い吉田城鉄櫓の野面積み石垣7などのように、高石垣・瓦・礎石建物で構成される「織豊系城郭」と呼ばれる城へと変貌を遂げていきました。

江戸時代になると、全国の諸大名を動員して行った土木工事としていわゆる「天下普請」が行われた城があります。愛知県内では名古屋城がそれにあたり、こうした城は国内の統治を強固とするための役割がありました。

一方で、幕府は元和元年(一六一五)の一国一城令や武家諸法度などによって、軍事的な城館の新規築城、または修築による強化などを制限してきました。こうした統制下で残された岡崎城や吉田城などの近世城郭は、城を中心に城下町が整備されたように、軍事的要素が弱まり、再び領域支配の拠点としての役割を大きく担うようになりました。

みなさんに身近にある城へ行ってみようかなと思っただけのような展示を企画していきますので、ぜひお越しください。

(文責:西島庸介)



4 上ノ郷城跡の石積み遺構(蒲郡市博物館提供)

れる足立右馬助に宛てたこの書状から、同月二十六日以前に元康が属した今川方が勝利したことがわかります。3. なお、寺部城を巡っては鈴木氏が今川方の攻撃をしのぎ切ったとされています。

永禄三年の桶狭間の戦い後、家康は三河平定に乗り出しました。

同五年、家康は今川方の鵜殿長照がいた上ノ郷城(蒲郡市)を激戦の末に攻め落としました。上ノ郷城跡の発掘調査によって、土師器の皿・鍋釜などの日用品のほか、戦いで使用したとみられる火縄銃の弾丸が発見され、この時期には珍しい鵜殿氏によるものとみられる石積み遺構も検出されています。4.

3 家康と武田氏との戦い、秀吉との対峙

永禄十一年(一五六八)家康の遠江侵攻から天正十二年(一五八四)小牧・長久手の戦い前後までを対象とします。

家康は、当初同盟関係にあった武田信玄、その後は勝頼と三河・遠江を巡って戦いを始めました。



5 長篠城址



6 西尾城二の丸跡の丸馬出遺構(西尾市教育委員会提供)

かつては武田氏の築城術とされたものですが、近年では家康の城でも採用されたことがわかっています。6. これは秀吉の三河侵攻に備えて既存の城を大改修したときの遺構と考えられます。

4 関東移封とその後

天正十八年(一五九〇)小田原の役後、家康は関東移封となり、東海地域には豊臣氏の武将が配置

